「ひなもろこ」

令和４年度　第１号

令和４年６月 20 日
発行者　　福岡県立田主丸特別支援学校長
担　当　　特別支援教育課　地域支援係

福岡県立田主丸特別支援学校
http://fhtanuyo.fku.ed.jp/
福岡県久留米市田主丸町石垣１１９０―１
TEL 0943-73-1537　FAX 0943-72-4341

「ひなもろこ」…日本では、田主丸の川にのみ生息する久留米市の天然記念物です。

向暑の候、皆様にはますますご健勝のことと存じます。

本校では、地域の皆様への特別支援教育の情報の発信や教育相談、巡回相談、研修協力等の地域支援を行っています。気になる子どもの課題整理や、検査・観察等のアセスメントによる共通理解、個別の教育支援計画や指導計画等の具体的支援内容など、子どもに必要なサポートについて考えていきます。また、他の特別支援学校や専門関係機関との連携支援も進めていきます。子どもに応じた支援について一緒に考えていきましょう。

本校の教育相談のご案内

教育相談では、特別支援教育に係る方々へ、以下のような支援をいたします。

- ○ 家庭や学校における、気になる子どもへの関わり方や支援の工夫について
- ○ 子どもに応じた指導内容や指導方法、教材教具の工夫等について
- ○ 子どもの実態把握や課題への対応の仕方、配慮事項について
- ○ 特別支援教育に関する情報の提供や教材教具などの紹介、貸し出し
- ○ 子どもへの直接的な支援や関わり、継続的な学習指導、進路や福祉情報提供など

電話相談　月曜日～金曜日　　14:00～17:00
来校相談　月曜日～金曜日　　14:00～17:00

※日程や時間帯は調整させていただきます。
※相談の費用は無料です。相談内容等についての秘密は厳守します。

お電話で「教育相談」とお伝えください。0943－73－1537（代）

地域支援研修会のお知らせ

今年度の研修は、福岡県教育センター特別支援教育部、部長の熊川宏昭先生をお迎えして行います。定員は先着20名となりますので、お早めに申し込みください。

〔日程〕 令和4年8月9日（火）　10:00～12:00（9:30～受付）
〔場所〕 福岡県立田主丸特別支援学校　体育室
〔内容〕「肢体不自由のある子供の理解と指導」
講師：福岡県教育センター特別支援教育部　部長　熊川　宏昭　先生

※ 事前に参加者の方にアンケートを記入して頂き、質問をもとにお話し頂きます。

※ 別途配布の申込用紙によりお申し込みください。

聴覚に過敏のある子どもへの支援

発達障がいの中でも、特に自閉症の子ども達は、感覚の過敏性のある子どもが比較的多いと言われています。例として挙げられるのは、聴覚が過敏なため特定の物音や甲高い声に不安を感じたり、触覚が過敏なため身体接触や衣服の材質に強い不快を感じたりするといったことです。ここでは、聴覚に過敏のある子どもへの支援について取り上げます。

○ 支援の具体例

【座席位置の配慮】

窓側の座席だと外の音が気になり、集中できない子どもがいます。余計な音が聞こえにくい環境を整えます。

【道具の活用】
イヤーマフやデジタル耳栓などを使い、苦手な音の刺激を小さくする。

【予告をする】
苦手な音でも、“いつ鳴るのか”“どうして鳴るのか”“いつ音が終わるのか”といった見通しがもてることで安心感に繋がる場合があります。

感覚の過敏性は、他者にはわかりにくいため子どもの様子を丁寧に観察しながら、無理をさせないように十分配慮する必要があります。

参考文献：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「改訂新版 LD・ADHD・高機能自閉症の子どもの指導ガイド」

ボディイメージについて

ボディイメージとは、簡単に言えば自分自身の心体像（脳の中にある自分の身体のイメージ）です。これらは視覚、触覚などの感覚器官や過去の経験などにより構成されます。

例えば、水たまりを目の前にした時、自分自身の脚の筋力やバランス能力など総合的に判断し、跳び越えようか、回り道をしようか、考えるとします。この時、ボディイメージにずれが生じていると、もし跳び越える選択をしても、跳び越えることは出来ず、足が汚れる結果になります。

この経験により、次に同じような水たまりを前にした時は、跳び越えようとはしなくなります。これはボディイメージが再構築されたことになります。

ボディイメージに関する興味深い研究があります。3歳から10歳の定型発達児161名を対象にした研究で、子どもが前方に跳ぶイメージをした距離と、実際に跳んだ距離の差を計測しました。

結果は、月齢が上がると自分の跳べる距離を正確に把握できるようになりました。

3歳児では、約90%の子どもが自分は遠くに跳べるとイメージしており、その距離は平均2倍をイメージしていました。4歳以降になると急激にこの誤差は小さくなります。子どもは発達に伴い、遊具や玩具など様々な環境へ働き掛け、それらの経験によってボディイメージが構築されていくことがこの研究からわかります。

運動に困難のある子どもでは、感覚を統合する機能的な問題に加え、経験の少なさにより、ボディイメージがうまく構築されていないと言われています。また、成功体験の少なさから、環境に対しての働き掛けが消極的になる場合もあります。

その子にあった補装具や支援機器などを用い、手足の動きの補助をしたり、手足の動きに合わせた運動や学習をしたりして、環境へ積極的に働き掛けてボディイメージを構築できるような支援をすることも大切になってきます。

参考文献：加藤 寿宏「子どもは自分の運動能力をどのくらい正確に把握しているのか？」作業療法 2010 29巻1号